

超自然的現象の存在感の形成プロセス

池田, 鮎美

<https://hdl.handle.net/2324/7363558>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (心理学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 池田 鮎美

論文名 : 超自然的現象の存在感の形成プロセス

区分 : 甲

論文内容の要旨

超自然的現象の存在感を知覚するプロセスを明らかにするために、知覚経験のきっかけであるとされる行為者性 (Agency) の誤検出、そして超自然的現象の一つである穢れの性質の解明を行った。超自然 (The supernatural) とは、自然界の法則や日常の経験を超えた能力や特性をもつ、理論的に説明がつかないもの全般を指す。超自然的現象には、神や精霊の他、おばけや怪異、魔力、呪いなどが含まれる。科学的な知識が広まった現代においても、超自然的現象は抽象的な概念として知られるにとどまらず、これらを見た、会ったという経験が報告される。実在しないはずの超自然的現象が、実際に「そこにいる」という実在感を伴って認識される理由は、見間違いや錯覚といった認知エラーをきっかけに形成されたものだとされている (Van Leeuwen & van Elk, 2019)。

第1章の序論では、超自然的現象が認知されるメカニズムに関する、宗教認知科学と心理学の既存理論について議論を行った。Barrett (2004) は、超自然的現象の認知のきっかけとなる見間違いやエラーは、脅威にいち早く対処するために Agency を過剰に検出してしまう認知デバイスの副産物であるとしている。Agency の過剰検出とは、例えばパレイドリア現象 (曖昧情報が顔に見える現象) などが例に挙げられる。しかし、なぜエラーがエラーであったという修正が起こらず、確かにそこに超自然的何かがいたという認識が起こりえるのかについては不明であり、そこに確かに対象が存在するという「実在感」の形成について検討が必要である。また、Interactive Religious Experience Model (IREM) は強い宗教的信念によって超自然的存在が認知されるとしている (Boudry, 2019)。しかし、宗教的信念と関わりが弱い超自然的現象も多く存在するため、信念以外の外部要因も Agency の誤検出や、そこに何かいるという実在感を生起しやすくしている可能性がある。そこで本研究では、宗教的信念以外の要因による Agency 誤検出の増加、超自然的現象である「穢れ」がどんな条件で存在感を持って扱われるのかについて検討することによって、超自然的現象の存在感 (Feeling of Presence) が形成されるプロセスの解明を試みた。

第2章では宗教的信念以外の要因による Agency 検出について検討を行った。実験1は、環境などの外部要因が、人の Agency の誤検出に与える影響について明らかにするために実施された。幽霊や怪異の伝承と関わりが深い丑三時や逢魔時といった時間に着目し、時間帯 (正午、逢魔時、丑三時) ごとの顔パレイドリア検出傾向を比較した。その結果、逢魔時、丑三時では正午よりも顔があると誤認する反応の増加が示唆された。実験2では、時間帯ごとに顔検出の傾向が変動する原因について検証を行った。実験2の結果は、睡眠不足と不安状態の影響、ならびに時刻に関わるネガティブ情動刺激の想起 (怪異の出現) がプライミングとして機能した可能性を示した。

第3章では、超自然的現象の FoP の性質解明を目指した。FoP について直接検討するために、超自然的現象の一つであり、不浄や忌避感の残滓である「穢れ」に着目した。穢れは行動免疫 (Schaller & Park, 2011) に基づいて嫌悪感情によってそこに実在するかのように扱われる。実験では道徳的

な嫌悪を喚起させ、物理的な汚れではない穢れへの FoP について検討を行った。実験 3 において、犯罪者（道徳違反者）と握手した実験者が参加者に握手を求めるという実験を実施した。その結果、事前に握手した相手が会社員とされていたグループよりも、実験者の印象は悪くなり、参加者が実験者からの握手に応答するまでの時間は遅延した。このように、人間同士の道徳的嫌悪の穢れは物理的接触を介して伝染するかのように扱われることが示された。実験 4 では、伝染がどの程度維持されて人から人へ移動しえるのか検証を行った。その結果は、嫌悪に対して敏感な群は道徳的に嫌悪される人物にタッチされた人物との接触を拒否した。実験 5 では、穢れの人から人への伝染には、直接の物理的接触が必要なのか検証を行った。参加者は、道徳的違反者と接触している個人、または空間的に離れている個人に対する印象を評価した。その結果は、道徳的違反者と直接接触した個人に対してのみ、否定的な評価が有意であったことを示した。実験 6 では、穢れの FoP 形成に関わる行動免疫が、社会情勢によって変化しえるのか検証を行った。コロナパンデミック下において、行動免疫の強さと関連する感染脆弱性意識は 2020 年で一時上昇したが、その後徐々に低下していたことが示された。行動免疫が社会的要因の影響によって変換することから、穢れの FoP の強さも変化する可能性が示された。

これらの実験から、宗教的信念が伴わない要因によって Agency の誤検出が増加すること、超自然的現象の一つである穢れは物理的に実在するかのように、FoP を持って扱われることが判明した。脅威を見逃さないように誤検出が多発する認知機構を人間が持つのであれば (Barrett, 2004)、脅威からのすみやかな回避には、誤検出された Agency がどこに存在しているかは非常に重要な情報である。このため、超自然的現象の存在感は、回避行動を促すネガティブ感情によって形成されている可能性がある。曖昧な認知情報への Agency 検出と恐怖や嫌悪の感情が伴った時、対象を避けるために存在感が形成されるというプロセスが提案された。本研究は認知的エラーや知覚情報のないものに対する実在感について、その認知的形成プロセスの解明に取り組んだ研究である。今後はさらに VR 技術などによるリアリティ研究を取り込んで検討を拡張させていく。